

「生意氣云ふな」とか、職掌柄の威厳で以て、凍えかゝつた新吉を無理に引き立てる。

足は痺れて了つた。

寒いのに御苦勞千萬に何の様だ。

「學校の尾上に聞いて呉れよば、俺が斷じて放火しない事は解る筈だ」

新吉は小綺麗な留置場の中へ裸にして入れられて箱辨當を食つた。

運命は陳腐だ。

地震や火事は今夜起るか知れないし、彼等は俺を危急から救ひ出す仁慈を持たないだらう。

万事に興奮しない様に氣を付けて、地球や宇宙の眞似をしなくてはならない。

薄い布團が二枚ある。

僕のかたはらへ一人の巡察は柏餅のやうにくるまつてねてゐる。

若し之が狂人であつたら夜中に僕の喉を締めるかも知れない。

聖朝署長の前へ引き出された。

「寒いのに君を保護する積りでやつたのだから怒らない様に」